

小説【おくのうそ道】

第一章

俳人。

このふた文字をほどいてみてください。

人非人。

俳句とは人非人のひとりごとだったんですね。

人非人。人であって人でない、世間に受けいれてもらえない人。

古今の名句も、じつはあんがいこういうろくでもないひとたちのひとりごとだったんだとおもえば、妙に親近感が湧いてくる。

そばに行つてじっくりと耳を傾けたくなる。

そして―

耳傾けているうちに、その、人非人のわりには妙におつに澄ました口調がだんだん気に入らなくなつてきてついいちやもんをつけたくなつたりするのも、これまた人情なのかもしれない。

『芭蕉さん、あなたのひとりごとなんだからこちらがとやかくいう筋合いのものではないかもしれないけどね、でも、おれだったらこういいいますね』

こういうお節介なひとたちが、かならずあらわれる。

つまり、古今の名句を勝手にいじくつて、じぶんの好きなようにつくり変えてしまふひとたちが―